

静岡方言についての一考察

はじめに

方言とは何か。辞書で調べてみると、「一つの言語とみなされるある言語（一國語）が、地域によつてその音韻・語彙・語法に差違が生じている場合の、それぞれの地域に行なわれる言語の総体。ある地域に行なわれていることば。」とある（『日本國語大辞典』）。今日、若者の間で好んで使われる流行語はほとんどがテレビや雑誌などのメディアから出た言葉であり、それはまた、はやりすたれの激しい一時的なものに過ぎない。しかし方言はそういうことばとは全く異なつた部類の言語であるといえる。

一つの方言が成立するためには、長い年月にわたり、多数の人々が使用することが必要な条件である。各地に現存する方言は、地理的、歴史的その他の必要な諸条件のもとに成長、発展を遂げてきたもので、それぞれが意外に強い生命を持つてい

るものであることは周知の事実である。

方言とか、伝説とか、民間の慣習とかいうものは、生きた日本人の生活実態を伝えるもので、それらを研究することは生活の考古学であり、考現学でもある。しかし、それらの生きた文化財は世代の移り変わり和社会の変化により急速に失われつつあるのである。

方言は、地域社会の成員にとつて、生まれてまず習得することばである。ある所に生まれ、少なくとも小学校を卒業するぐらいまで同じところに住めば、その人のことばの骨組みは、その土地のことばになる。

私は静岡県のほぼ中央に位置する清水市に生まれ、高等学校を卒業するまでそこに住んだ。そして、大学入学と同時に初めて静岡を離れ、東京で生活を始めた。そこで、それまで自分と違ふ所で生活してきた人々と話しているうちにはじめて、静

五 條 裕 子

岡に在る限りはそれを普通に使い、方言であると意識したこと
もなかつた言葉が、実は静岡方言であつたり、共通語と異なる
一部の地域のみで話されることばであるということなど、その
ことばの微妙な違いに気づかされた。

私が方言やその他の言語学を学びたいと考えたのも、今回卒
業論文のテーマとして「静岡方言」を設定したのも、本当の静
岡方言とはどのようなものなのかを知り、そうした言葉をどの
程度の人が使っているのか、日常どのようにどの程度使われて
いるのかを確かめてみたいと思つたからである。

本来ならば、県内に居住する様々な年齢層の人々から実際に
アンケートをとつてその実態を明らかにしていくことができた
らよいのだが、今回は私自身の準備不足や、それ以上の時間不
足もあり、静岡方言に関しては、静岡市立静岡高校郷土研究部
や静岡銀行によつて行なわれた実態調査の資料をお借りした。
また、その他の方言分布の考察などにあつては、国立国語研
究所の『方言文法全国地図』や『日本言語地図』などの先行の
資料に頼ることとした。

第一章 方言の分布

第一章では動詞についての方言地図をいくつか例示して、各
地図ごとに解説をしていく。方言地図とは全国の方言の特徴を
分布地図にして表したものである。地図の上に地理的分布を見
ることができ、現在の方言の状況を知ることができるので、方

言分布を研究するには非常に適した資料である。ここでは国立
国語研究所の『方言文法全国地図』を資料として、これを略図
化して解説するが、略図化に当たつては、私自身の見識によつ
て行つたものであり、ここで掲載する略図はおおまかなもので
あることを断つておく。

一 「飽きる」について

まず最初に、「飽きる（終止形）」の地図を取り上げる。この項
目は、「仕事に飽きる」というときの「飽きる」はどうですか
（どのように言いますか）という質問に対しての答をまとめたもの
である。

全国の分布は、大きく分けて三種類にわかれる。東日本の「ア
ギル」類と中部から近畿にかけての「アキル」類と西日本の「ア
ク」類の三種類である。「アギル」類と「アキル」類の分類は単
に発音の地域差によつて「アキル」が濁音化して「アギル」に
なつたことで生じた分類で、すなわちふたつは同じ「アキル」
類と考えてよいだろう。この類と「アク」類の分類に関しては、
上一段化する以前の四段活用動詞「飽く」の形が依然として残
る地域と、新しい上一段化した「飽きる」を使う地域とで分類
がなされると考えられる。

「アギル」類と「アキル」類の境界線は、茨城県を東北地方に
含めて東北地方と関東地方との境界線に当たつる。この境界線よ
り北が「アギル」類の領域、西が「アキル」類の領域となつて

いる。しかし、先に述べたとおりに、これら二つの分類は濁音を発音する地域に「アギル」類が出来上がったもので、同じ「アキル」類と考えるとよいので、この境界線は「飽きる」に対して濁音を用いて発音する地域とそうでない地域との境界線と考えればよいだろう。

次に「アキル」類と「アク」類の境界線を見てみると、こちらには「アギル」類と「アキル」類の境界線のように線を引くことができない。まず、「アク」の用例が多く見られるようになるのは静岡県の西部からである。静岡県東部では「アキル」しか見られないことから、静岡県を東西に二分する辺りではまず第一の境界線を引くことができる。この境界線は分布地図に地理的条件を合わせて考えてみれば、大井川を境界線と定めることができる。このことについては後の章で詳しく述べるが、静岡県は数々の大型河川を持ち、それらは古くから人々の往来を妨げてきた。中でも大井川は特に川越えが困難であったといわれている。こうした地理的条件によって言語の境界となることは当然のことであり、大井川が境界線となったことはこのようなケースのよい例といえる。

さらに静岡県以西をみていくと、「アク」類である愛知県を除いて「アキル」類が広く分布している。次に「アク」類が分布しているのは奈良県・和歌山県・大阪府の近畿の三府県である。その他の府県では「アク」の例もみられるが「アキル」の例の方が用例の数を見た限りでは勝っているので、ちょうどこの三

府県と三重県・京都府との県境に第二の境界線を引くことができる。中国地方でも、近畿地方と同じように「アキル」と言う地域と「アク」と言う地域とが混ざりあっている。ここでおもしろいのが広島県で「アグ」と発音する例が多く見られる点である。「アグ」の例が見られないことから「アギル」の場合のようには「アグ」の発音が濁音化して「アグ」になったものであるといえる。であるから、ここは「アグ」類の領域とみてよい。この辺りで「アキル」類と「アク」類とが混在しているのは動詞「飽く」が上一段化した後にも近畿・中国地方では「アグ」から「アキル」に完全には統一されずに、上一段化した地域としなかつた地域ができてしまったせいである。

四国地方には特別に「タル」類が分布していて、愛媛県を除いた地域で「タル」が広く使われている。これはおそらく「十分」になつてもうたくさんだと思ふ。』（『日本国語大辞典』）の意から「足りている」の意でできたものであると思われる。例えば、この方言文法地図の例題でいえば、「仕事は十分にしまつてもうたくさんである、もういい」の意で、もとは「仕事をするという気持ちに対して仕事が十分に足りた」ということであろう。この「足りる」が古い「足る」の形で残つたものを「飽きる」の意で用いていると考えられる。

九州地方は、「アグ」類の領域とみてよいだろう。例外として長崎県の「アキル」があるが、ほかの言い方も多く、中でも「アグ」の例は「アキル」に続いて多くみられるので、ここも「ア

ク」と切離してみることはできない。また、宮崎県に関しては、単独の用例の数では北部の「アク」の例に対して南部にはほぼ同数の「アンドスル」(安堵する)という例があったが、分布を明確にするために添付の地図上では「アク」類の領域とした。鹿児島県についても、方言文法地図では「アツ」の例が最も多くなっているが、これはこの地域の語尾の促音化が著しいという音韻上の特徴によるもので、「アク」が「アツ」と発音されると考え、添付の私作の地図(紙幅都合で省略)ではこちらにも「アク」の領域とした。この地図の示すとおり九州地方が「アク」類の領域であることは明らかである。九州地方では「飽く」がまだ上一段化せずに、四段動詞「あく」のまま話されているとみてよいだろう。

こうして見てみると、東日本では「飽く」という動詞が完全に上一段化して「飽きる」の形で話されているが、西へ移るにつれ「飽く」の形が残る地域が増え、九州にいたってはほぼ「飽く」のままであることがわかる。これはすなわち四段動詞「飽く」が東日本、おそらく東京(江戸)の辺りから上一段動詞「飽きる」に変化したということであるといえる。「日本国語大辞典」をみると、「飽きる」とは「四段活用の「あく」から転じて、近世後期ごろから江戸で使われるようになった語」とある。近世の用例としては次のような例があげられている。

ばかのろいがあきられるまでは (洒落本・契情實言告鳥一土
斯かうおそくてはあきるはな (滑稽本・素人狂言紋切形一下)

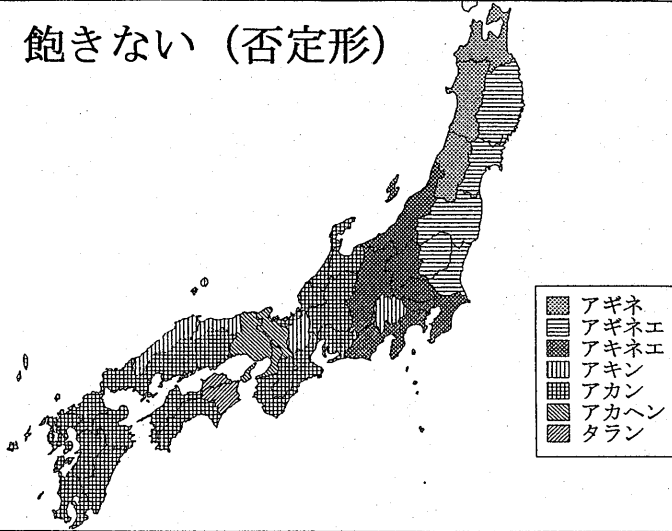
二 「飽きない」について

続いて「飽きる」の否定形、「飽きない」の地図についてみていく。これは、「一日中テレビをみても飽きない」というときの「飽きない」はどうですか。」という質問に対する答をまとめたものである。上一段化によって東西で新しい形と古い形の二大対立をなす「飽きる」・「飽く」が、否定形ではどのような分布を示すのかという点から比較、考察していく。

「飽きない」の全国の分布は、基本的には「飽きる」の分布と非常によく似ているが、「飽きる」よりもさらに単純になっている。大まかにいえば、東北地方の「アギネエ」類、関東地方から東海東山地方(新潟、長野・山梨・静岡、岐阜・愛知)の一部までの「アキネエ」類、その他の東海東山地方から西の「アカン」類に分類される。「飽きる」の場合と同様に「アギネエ」と「アキネエ」は同類とみてよい。また「アキネエ」は「ナイ」が江戸語の口頭でしばしば「ネエ」といったところから、「アキナイ」が「アキネエ」になったとみてよいので、これは東部の「アキナイ」類と西部の「アカン・アキン」類の東西二大対立を成しているといえる。

ではその境界線はどこを走っているのか。添付の私作の地図をみると、ほぼ静岡県の大井川上流から長野と岐阜の県境、新潟と富山の県境付近を走っている。これは、第一節でも述べたとおり自然の障壁がそのまま言葉の障壁となっているといえ

飽きない (否定形)



る。大井川は川越が困難であったし、長野と岐阜の県境、新潟と富山の県境にはあの日本アルプスなど、飛騨山脈の峰々が連なっていてこちらも人々の往来を妨げていたに違いない。メディアの発達していなかった昔、言葉の伝達は人々の会話でのみなされていたのだから、ここに境界線が引かれたことは当然の結果であるといつてよい。ここから東が新しい「アキナイ」(アキネエ)類の領域、西は古い形の「アカン」類の領域とされいに東西に二分される点が「飽きる」と異なる点である。

「アキナイ」類と「アカン」類の分別は要するに打消の助動詞「ナイ」と「ン」の分別である。「ナイ」と「ン」が東西を大きく二分する指標となる語であることはよく知られている。しかし、今日の共通語としては「ナイ」が使われることが普通で、慣習的な用法を除いては、「ン」は文章語として「ヌ」が使われることがあるぐらいである。またこの「ヌ」の場合も、「ズ」の連体形が終止形化して発生したこの名残なのか、終止形としてではなく、連体形として用いられることが多い。そしてその「ン」のもう一つの側面として西部方言があるのである。

そもそも「ナイ」は上代東国方言の打消の助動詞「ナフ」の系統を引くものであるとされる。また、その「ナフ」は、打消の助動詞「ズ」の連体形「ヌ」に上代の継続の助動詞「アフ」のついた「ヌアフ」が音変化したものとする説と、「ズ」の未然形「ナ」に反復継続の助動詞「フ」がついたものとする説があるが、どちらにしても「ナイ」は「ズ」から来たものといえる。

ということとは、「ナイ」と「ン」は同根のものであるといつてよい。それが、西部では「ン」を用いていたのに対し、東部においては「ナイ」を用いるようになったものといえる。
すなわち、こういうことである。

(西部) 「ズ」↓「ヌ(ン)」

(東部) 「ナフ」↓「ナイ」

ではいつごろから東部で「ナイ」の形が見られるようになったのか。

文献上では、ロドリゲスの『日本大文典』の「ある国々に特有な言ひ方や発音の訛に就いて」の中の「関東、又は坂東」における、

打消にはヌの代りに動詞ナイを使ふ。例へば、アゲナイ(上げない)、ヨマナイ(読まない)、ナラワナイ(習はない)
マウサナイ(申さない)、など。

と記されたものが早いもので、近世江戸語以降、次第に東日本で広く使われるようになったようである。

ここに近世以降の形容詞・助動詞「ナイ」の用例をあげておく。(形容詞は参考のためにあげた)

「ここに鍵はない。」(薩摩歌 一七〇四年)

「道理に向う矢先はない。」(心中重井筒 一七〇七年)

近松門左衛門の作品をはじめとして、この時代の洒落本、滑稽本、人情本などの作品には、「ない」が多く使われている。ま

た、江戸で書かれたものは「ない」ではなく、「ねえ」が使われていることも多い。「所在ない」は参考のためにあげた)

「上方者はどうしても所在ねへ。」(滑稽本・柳髪新話浮世床初編 卷之中 一八一三年)

以下は助動詞の例である。

「ときは是ばかりじゃさへねえ。」(洒落本・傾城買四十八手 一七九〇年)

「飽きない」の早い例もここにあげておく。

「肘の上二三寸の所まで見えるふっくりしたひぢが、未造のためにいつまでもあきない見ものである。」(雁 一九一一年)

(三)「する」について・四「しろ」について、は省略)

五 方言の分布

方言を分類する場合、東西に二分してそれぞれが対立するというのが、日本の方言分布の基本となっているようである。そして、その境界線というのは、新潟県の糸魚川から、長野県と岐阜県の県境を通り、静岡県の浜名湖あたりにおりてくるものが多いようである。また、ことばによっては、静岡県の大井川を境界とするものもある。

では、その境界線の走る東海東山地方に地域をしぼってみると、その傾向をもっとよく知ることができるのではないだろうか。

か。いずれにしても、日本方言を考えると、まずこの東西対立型の分布を外して考えることはできない。とすると、東海東山方言が一つの大きなポイントであるといえる。

第二章 東海東山方言の傾向

東海東山地方が、東西の方言の漸移地帯であり、東西対立型のことばの多くが、この地域に境界線を走らせていることが第一章でわかった。第二章では、範囲をこの東海東山方言に狭めて、第一章と同様に地図を使って考察していこうと思う。ここでは、国立国語研究所の『日本語地図』を資料とする。

沢木幹栄氏の「物とことば」のはじめに次のような記述がある。(「日本の方言地図」)

言語学の重要な命題の一つに、「ことばの意味と音(形式)との関係は恣意的である」ということがある。「恣意的」は「非必然的」としたほうがいいかもしれない。たとえば、日本語で「馬」と呼ばれるものが「ウマ」という音で表わさなければならない必然性は全くないということである。

もちろん、「馬」を「ウマ」と呼んでも不都合はない。だが、もっと別の音で呼んでも同じように不都合は生じない。たまたま、日本語で「ウマ」と呼ぶのが約束事になっているから、そう呼ぶだけのことである。

方言では、ある物が共通語とは全く別の言葉で呼ばれることが多い。他の地域の人が聞いたこともないような単語も、その

地域では何物かを指示する言葉なのである。方言の単語が何物を指示するのか、ある物を指示するとき方言ではどのようなのか。その、物と方言との関わりについてみたいと思う。中でも、地域によって差がつきやすく、その地域の特徴の表れやすい、生活のごく基本にある「食べ物」の名前を取り上げようと思う。

(一)「かぼちゃ」について、は省略)

二 「なす」について

次のものは「なす」(茄子)である。これはなすを絵で示して、「こういうものを何と言いますか。濃い紫色です。」と質問した時の答をまとめたものである。

全国的な傾向としては、東西を大きく二分する東西対立型の分布を示している。東日本を「ナス」類、西日本を「ナスビ」類と分類することができるが、その分類区は非常にわかりやすく全国を二分している。そして、その境界線がこの東海東山方言の領域を走っているのである。

東海東山方言は、静岡県・山梨県・長野県・新潟県が「ナス」類、岐阜県が「ナスビ」類、愛知県は東部が「ナス」類、西部が「ナスビ」類と分類できる。すると、「ナス」類と「ナスビ」類の境界線は、新潟県の南部から長野県と岐阜県の県境、愛知県の中央部を通って渥美半島まで引くことができる。この地域

181. なす

「こういうものを何と言いますか。濃い紫色です。」

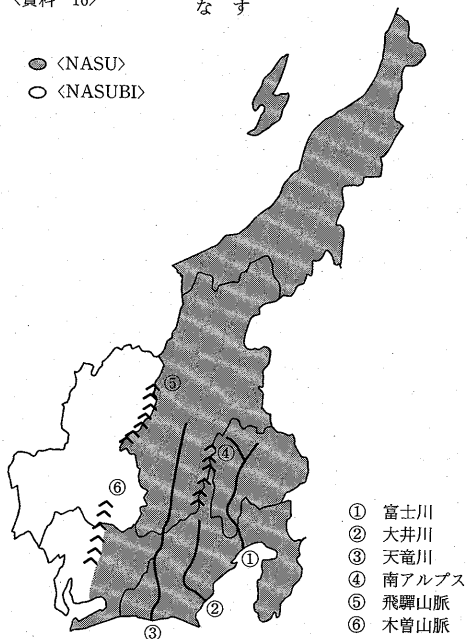
| | | | | | |
|-----|------------------------|----|-----|------------------------|----|
| 岐 阜 | <NASU> | 2 | 新 潟 | <NASU> | 33 |
| | <NASUBI> | 17 | | <NASUBI> | 4 |
| | { <NASU> <NASUBI> } | 5 | | { <NASU> <NASUBI> } | 2 |
| | | | 長 野 | <NASU> | 35 |
| | | | 山 梨 | <NASU> | 8 |
| | | | 静 岡 | <NASU> | 29 |
| | | | 愛 知 | <NASU> | 10 |
| | | | | <NASUBI> | 6 |
| | | | | { <NASU> NASUBI } | 3 |

| | |
|--------|-----|
| NASU | 117 |
| NASUBI | 27 |

<資料 16>

な す

- <NASU>
- <NASUBI>



- ① 富士川
- ② 大井川
- ③ 天竜川
- ④ 南アルプス
- ⑤ 飛騨山脈
- ⑥ 木曾山脈

に境界線が走ることは多いということは、第一章でも述べたとおりである。

なすの場合、東西を二分する分類とはいっても「ナス」と「ナスビ」では、本来ならば同類とみられることもできる程度の違いである。実際、東北にも数か所「ナスビ」と呼んでいる地域もある。また一方で、西日本でも「ナス」といっても「なす」であるということを通じる。

「なす」と「なすび」を辞書で調べてみると、当然どちらも意味は同じである。それから、「ナスビ」という呼び方がもととあって、それが変化化したものが「ナス」であることがわかる。すなわち、「ナスビ」が東日本（おそらく東京（江戸）で）「ナス」の形になったものが共通語の「なす」になったということである。それが、東海東山方言でも使われるようになったが、このことばも自然の障壁を前に、さらに西に伝播を続けることができず、ここに境界ができたようである。

このことばは、日本語の変遷をみる場合にも、東海東山方言の特性をみる場合にも、非常にわかりやすくそれを示す良い例ではないかと思う。

三 「とうもろこし・とうがらし」

ここでは「とうもろこし」と「とうがらし」を並行してみていく。というのは、この二つは見た目も種類も全く異なるものでありながら、同じ呼び方を持っているからである。そして、

それが東海東山方言でみられるのである。その、共通する「ナンバン」という呼び方を取りあげてみていくこととする。

まず、「とうもろこし」だが、これも絵を示して、「これは何と言いますか。夏の終りごろとれます。薄緑色の皮があつて、赤い毛のふさがついています。」と質問したものである。こちらは全国的にその呼び方の種類が多い。ここで取りあげる「ナンバン」類に属する呼び方を使っているのは近畿地方、中国地方、愛知県の三河地方の西日本である。「トウモロコシ」類は本来、関東から静岡県での呼び方であったようである。しかし、静岡県の西部、それも愛知県に近い西遠地域では「ナンバンキビ」というところが多い。これは、三河地方の「ナンバントウ」と地理的につながり、西日本の「ナンバン」類となる。

続いて「とうがらし」はどうだろうか。これは「こういう赤くなって、辛いものを何と言いますか」と質問したものである。こちらは「とうもろこし」と比べるとまとまった分布になっているといえる。「とうがらし」を「ナンバン」というのは、東北方と東海東山地方の糸魚川から浜名湖までの境界線になりやすいラインの東側の地域である。静岡県の東部を含めた関東地方と、東海東山地方を飛び越し愛知県西部を含めた西日本では「トウガラシ」となる。ほかに注目したい点としては、長野県で「ゴシヨウ」類が多く分布している点があげられる。これは九州に広く分布するもので、この地域でこのように使われていることは興味深い点ではあるが、ここでは「ナンバン」について述

べたいと思うので、あえて触れるだけにしておきたいと思う。

ここで注目したいのは、「ナンバン」類に属する東海東山地方にあって、西遠地域から三河地域で孤立的に「トウガラシ」類の「トングラシ」が使われている点である。すなわち、先の「とうもろこし」と合わせて考えると、東海東山地方のほぼ全域で、「ナンバン」といったら「とうがらし」を意味するのであるが、この地域に限っては「ナンバン」といったら「とうもろこし」を意味するのである。この地域は西日本的なのである。

また、この二つの地図を比較すると「ナンバン」に関する点で、もう一つおもしろい点がある。静岡県と愛知県の県境に近い地点で、「とうもろこし」も「とうがらし」も、いずれも「ナンバン」と答えている地点がある。全国には、両方が「ナンバン」類に属しているという地域もあるが、その場合は「とうがらし」を「ナンバン」といえば、「とうもろこし」は「ナンバンキビ」というような区別がされている。これらの点を合わせて考えると、「ナンバン」の分布状況からも、おそらく、もともとはこの地域においても「ナンバン」は「とうがらし」を意味していたのではないだろうか。そこへ、「とうがらし」を「トウガラシ」と呼ぶ西日本の地域から、「とうもろこし」を「ナンバン」と呼ぶ呼び方が入ってきて、それがこの地域で定着してしまい、このような分布となったものと思われる。

四 東海東山方言の傾向

これまで述べてきたことのまとめになるが、東海東山方言は、東西両方言の漸移地帯として非常におもしろい分布を表している。地域の独特の方言など少なくとも、東側の地域では、関東方言や、東北方言などの東のこぼの影響を受け、西側の地域では、北陸方言や近畿方言などの西のこぼの影響を受け、東西の言葉が混じり合い、多くのこぼを持つような分布を示したりするのである。

この地域は、明治三十六年の国語調査委員会の方言調査による『国語法調査報告書』以来、東西両方言の境界線が引かれる地域とされてきた。日本の中心に位置しながら、有数の大型河川を持ち、その中央に日本アルプス、飛驒山脈を持つ。こうした地理的条件がこのような東海東山方言を作りあげたのである。この東海東山方言のかたち、日本方言のかたちをみることができると言っても言い過ぎではないだろう。

第三章 静岡方言の特徴とその基本的性質

一 静岡方言の基本的性質

例えば、同じ日本人の青森県に住むおばあさんと、鹿児島県に住むおじいさんとが出会って、お互いが土地の言葉で話し出したとしたらどうなるだろうか。お互いが面食らい、理解し合

えることはないだろう。と同時に、二人の間に入って完璧な通訳をすることのできる人もまぎらないだろう。それほどに方言とは多種多様なのである。中でも静岡県は日本のほぼ中央に位置し、東西の言葉の交差点になっていることから大変豊富な方言を持つ地域といえる。

静岡県の方言は、方言区画の上では東部方言の中の東海東山方言に属する。しかし、県東部は東部方言であるが、県の西へ進むにいたがつて西部方言的な色合いが濃くなり、東西二大方言の漸移地帯としての性質を持っている。例えば、第一章で挙げた動詞「飽きる」は県の東部から中部にかけては「アキル」、西部では「アク」となっており、否定形の「飽きない」でも同様に県の東部から中部では「アキネエ」、西部では「アキン」となる。これらの言語的特徴の分布にいたがつて、静岡県の方言を区画するとすれば、次のように四つに区分できる。

- 一 東部方言 富士川以東の県東部と伊豆地方を合わせた地域
- 二 中部方言 富士川以西から大井川までに、掛川以東の東部を含めた地域
- 三 西部方言 大井川以西の遠州全域
- 四 井川方言 大井川上流の旧井川村（現静岡市）を中心とする地域

と、このようである。（『静岡県方言辞典』による）

第一章でも触れたが、静岡県には東から富士川・安倍川・大

井川・天竜川と有数の河川があり古くから人々の往來を妨げてきた。区画の境界線となる富士川と大井川は、県を三分するよう流れる大型河川である。また、大井川は、全国でも特に川越えの困難な川で、川越えの足を使つての川越えのみがその手段であつたことから、特に人々の往來を妨げていた。こうした人々の往來を妨げる自然の障壁はまた、言語の広がり障壁でもある。言語は人の口で話されることによつてその領域を広げて行く。人の往來が困難であれば、言語の広がりも困難になるのである。だから、静岡方言はこのように区画され、県東部は東部方言の影響を受けたもの、県西部は西部方言の影響を受けたものと、東西で違つた方言がみられたりするのである。

二 静岡方言における地域差

第一章、第二章では全国における方言の地域差や、東海東山方言における地域差などをみてきたが、ここでは、さらに範囲を狭めて静岡方言における地域差についてみていこうと思う。

これまでに、静岡県の東部の浜名湖周辺や、また、県中部の大井川の辺りを言葉の境界線が走つてることがわかつた。静岡方言においても、同じ辺りで境界線が走つていのだろうか。ここでは、前に挙げた静岡方言の区画のもととなる西部地方、中部地方、東部地方の三地域に分けて行われた調査の結果をもとにみていこうと思う。

ここで用いる資料は、静岡銀行が一九八一年に、県内支店四

[資料1] 静岡方言の地域差

静岡銀行「アンケート調査・静岡弁とわたしたち」より

表1 静岡弁の知名度・使用度（『静銀の窓』掲載）

| | 知名度 | | | 使用度 | | |
|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| | 東 | 中 | 西 | 東 | 中 | 西 |
| 1 ごせっばい | 12% | 86% | 17% | 2% | 33% | 3% |
| 2 ひどろしい | 30 | 61 | 12 | 8 | 19 | 1 |
| 3 ぶしょったい | 91 | 99 | 98 | 50 | 77 | 59 |
| 4 みるい | 28 | 93 | 62 | 10 | 33 | 22 |
| 5 なりき | 7 | 81 | 21 | 2 | 52 | 13 |
| 6 おおぼったい | 36 | 61 | 79 | 13 | 22 | 35 |
| 7 やぶせったい | 59 | 77 | 18 | 27 | 22 | 3 |
| 8 おとましい | 21 | 94 | 84 | 7 | 54 | 39 |
| 9 らんごく | 4 | 31 | 86 | 1 | 7 | 44 |
| 10 みこ | 35 | 63 | 44 | 12 | 24 | 13 |
| 11 こば | 41 | 57 | 18 | 52 | 12 | 3 |
| 12 ぼった | 9 | 44 | 18 | 2 | 21 | 2 |
| 13 あたける | 7 | 48 | 55 | 2 | 7 | 16 |
| 14 ぶそる | 3 | 81 | 13 | 1 | 32 | 3 |
| 15 やつきりする | 51 | 91 | 97 | 29 | 75 | 60 |
| 16 ぶっさらう | 56 | 96 | 89 | 13 | 32 | 24 |
| 17 ぼったつ | 34 | 77 | 28 | 12 | 24 | 7 |
| 18 かまう | 80 | 95 | 88 | 40 | 39 | 36 |
| 19 うっちゃる | 85 | 95 | 90 | 41 | 52 | 46 |
| 20 くすぐ | 9 | 50 | 24 | 3 | 14 | 9 |

(イ) 知名度、使用度ともに他地域に比較して高い数値を示す語。

| | |
|----|----------------------------------|
| 東部 | かんだるい、ひゃっこい、やぶせったい、こば、きゃある |
| 中部 | おぞい、なりき、ごせっばい、ぶそる、ぼったつ、ぼった、ひどろしい |
| 西部 | らんごく、～さら、おおぼったい、ぞんぐり、あたける |

| | 知 名 度 | | | 使 用 度 | | | |
|----|-------|-----|-----|-------|-----|-----|-----|
| | 東 | 中 | 西 | 東 | 中 | 西 | |
| 21 | さばける | 63% | 84% | 60% | 17% | 21% | 13% |
| 22 | まめったい | 77 | 99 | 87 | 58 | 76 | 47 |
| 23 | おぞい | 68 | 96 | 34 | 28 | 62 | 8 |
| 24 | ひゃっこい | 90 | 96 | 83 | 46 | 31 | 26 |
| 25 | ひつっこい | 87 | 91 | 83 | 49 | 57 | 35 |
| 26 | かんだるい | 87 | 97 | 69 | 65 | 59 | 18 |
| 27 | しょんない | 80 | 97 | 94 | 29 | 69 | 64 |
| 28 | ぬくとい | 85 | 97 | 94 | 23 | 39 | 35 |
| 29 | せつない | 85 | 95 | 87 | 45 | 58 | 45 |
| 30 | ぞんぐり | 4 | 42 | 38 | 1 | 13 | 26 |
| 31 | ええかん | 56 | 76 | 43 | 18 | 19 | 8 |
| 32 | たんだ | 65 | 79 | 26 | 21 | 24 | 5 |
| 33 | せんころ | 50 | 71 | 26 | 12 | 12 | 2 |
| 34 | そのいとに | 72 | 81 | 26 | 21 | 21 | 4 |
| 35 | はだって | 74 | 88 | 44 | 35 | 37 | 16 |
| 36 | こればっか | 86 | 93 | 77 | 42 | 36 | 28 |
| 37 | ちょっくら | 86 | 97 | 86 | 26 | | 21 |
| 38 | あらすか | 36 | 87 | 78 | 8 | 19 | 18 |
| 39 | ずら | 89 | 92 | 84 | 22 | 18 | 16 |
| 40 | じゃん | 75 | 96 | 94 | 31 | 53 | 58 |
| 41 | ぜえ | 40 | 53 | 33 | 10 | 7 | 5 |
| 42 | さら | 42 | 81 | 71 | 12 | 35 | 42 |
| 43 | おまっち | 61 | 87 | 31 | 11 | 11 | 2 |
| 44 | きゃある | 79 | 75 | 29 | 14 | 3 | 1 |

(ロ) 知名度、使用度ともに他地域に比較して低い数値を示す語。

| | |
|----|----------------------------|
| 東部 | らんごく、ぞんぐり、なりき、あたける、おとましい |
| 中部 | (なし) |
| 西部 | ひどろしい、せんころ、やぶせったい、こば、そのいとに |

十店の行員九四〇人を対象に行った『アンケート調査・静岡弁とわたしたち』の調査結果である(↓「資料1」)。調査対象の人々の出身地のうちわけは次の通りである。

(東部出身 一三六人・中部出身 三四〇人・西部出身 三七四人)

年令構成は、詳細は不明だが、おそらく、二〇代から三〇代の人が多いようである。

念のためふたたび述べておくが、静岡県の地域の区分は富士川より東を東部、大井川より西を西部という。

では、資料の方をみていくが、このような静岡県方言の使用状況を、西部、中部、東部と地域別に調査した資料というものはほとんどなく、この静岡銀行の資料は大変貴重な資料である。

この資料を見てまず気がつくのは、知名度、使用度ともに中部地方で高い率を示している点である。これは、おそらく関東方言の影響を受けやすい東部と、近畿方言・北陸方言などの影響を受けやすい西部に比べ、中部というのはことばが安定しやすい地域であると考えられる。また、反対に、東部のことばと西部のことばの両方が入ってきやすく、東西の両要素が混然とした形で入り込んでいる地域であるとも考えられるのである。いずれにせよ、そのような環境から、中部がこうして高い残存状況を示したのではないかと思う。

また、知名度、使用度ともに高い数値を示す語も、低い数値を示す語も地域によって異なっていることがわかる。どちらか

といえば、その語群は対照的であるといえる。西部で知名度、使用度ともに高い数値を示す「らんぐく」(乱雑)、「ぞんぐり」(ひやつとする)、「あたける」(ふざける・さわぐ・あばれる)などは東部では低い数値を示し、反対に東部では高率の「やぶせつたい」(うっとうしい)、「こぼ」(鴨)、「おぞい」(粗末だ)などは西部では低率となっている(括弧内は意味である)。

このように、静岡県方言においても、第一章、第二章でみてきたものと同様に、大井川や富士川といった大型河川によって方言の分布に大きな差がでていることがわかった。

三 静岡方言の実態

静岡方言とはいっても、実は静岡県内でだけ使われているという言葉ばかりではなく、どちらかといえば近隣もしくは予想外に離れた地域でも同じように使われている共通の方言が多い(これについては第一章、第二章で実証済みである。また、第四章でも触れる)。したがって、厳密に言えば静岡方言であるかどうかの判断は非常に困難であり、どの言葉を静岡方言とするかに掲載される言葉をもっていわゆる静岡方言とし、その中から代表的な静岡方言といわれているものをいくつか例としてとりあげて、それに対する静岡県民と方言との関わりの実態を探っていくことにしたい。

まず最初に、静岡市立静岡高校内で高校生二百人を対象に実

施されたアンケートに関する資料(↓「資料2」)を拝借して、若い年齢層における静岡方言の実態を明らかにしていく。

(一) ごせつぽい(せいせいする)

例) 今日はいいい天気でごせつぽい。

(知っている人・使っている人)

41:8(%)

「ごせつぽい」というと清々しないようなニュアンスがあるが、漢字で「御所つぽい」とするとなんとなく方言本来の雰囲気が出てくる。御所の広々と静かなスツキリしたところからきたという。『俚言集覧』に「駿河にて清潔を云ふ」とあるので、古くから静岡方言として使われていることがわかる。『日本国語大辞典』には『大言海』の「ゴセオホシ(後世多)の急呼。後世に安楽多しの意」という語源説が掲げられている。

(二) ぶしよったい(汚い・見てくれの悪い)

例) あの人の服はぶしよったい

99:80

この言葉は静岡方言の代表的なもので、よく知られているし、またよく使われる。高校生でも使用率の高いことから、年令に区別なく使われているようである。「不精である」からきたもので「くったい」という接尾語は静岡方言によくある形である。

(三) ぶつさらう(打つ・殴る)

例) くいをぶつさらう

98:57

「ぶつ」の変形で、方言というよりは、下品な共通語といった方が良いのかも知れない。私などは、例のような「打つ」の意味よりも「ひっぱたく」の意味の方がピンとくる。例えば、子供をしかるるときなどに「ぶつさらうよ。」などというのである。

(四) おぞい(粗末だ)

例) この机はおぞい

95:66

この言葉も静岡方言の代表的なものかと思つたが、隣接する山梨県や長野県や神奈川県の一部の地域でも使われているようである。発生についての正確なことはわからないが、静岡県の、特に県中部では方言として強く意識されつつも、比較的良く使われる語である。そういった点では(二)の「ぶしよったい」とよく似た傾向がみられる。

(五) くじゃん(くではないか)

例) これでいいじゃん

96:76

この言葉は、最近ではテレビなどでも聞くことがあるので、若い人たちの間では全国的に広い地域で使われているが、そもそもは「ジャン言葉」と呼ばれ、静岡県・神

奈川県の海沿いの地域で使われていた言葉のようである。そのため静岡では若い年令層に限らず、中高年令層の人たちも使っているのが大きな特徴である。

(六) くずら(くだろう)

例) 明日は雨ずら

90・6

これも静岡方言の代表のようにいわれる言葉づかいであり、この辺りをまとめて「ズラ地帯」といわれたり、「ソウズラ」なんて名前のお菓子まである。特に高年令層の人たちに使われており、あまりスマートな言葉づかいではなく、なんとなく田舎っぽい言葉なので、若い人にはあまりつかわれていない言葉である。

こうして静岡方言と高校生の関わりの実態を眺めてみると、若い高校生の間でもいわゆる静岡弁が日常生活の中で使われていることがわかる。ただ、使用頻度が50パーセント以上の例をみてみると、特色のある、いわゆる伝統的な静岡方言というのは少なくなっている。特に、「ひどろしい」(まぶしい)「やぶせつたい」(うっとしい)などは10パーセントを割っているもので、何年か先には消えて行くことも考えられる。それに対して、「ちよつくら」(ちよっと・少し)「しょんない」(仕方ない)「かんだるい」(だるい)など共通語が多少訛った程度のようなものは共通語になれた若い世代にもその意味が理解しやすく、比較的使いやすいか、使用率の上位に位置している。単語そのものが共通

語とかけ離れた言葉は、やはりだんだんと使用されなくなる傾向にあるようだ。

例えば話し言葉でなら、静岡方言を他の土地の人が理解できなくても、言い変えるなどすれば理解することができるが、手紙などの文章中で書き言葉としてこれを使うと、相手はその意味を理解しかねることもあり、具合が悪いことになる。そういう意味では、方言の使用が減少し、共通語が使用される傾向は望ましいことであるとも言える。しかし、静岡の人間にとつて静岡の言葉はたいへん愛着のあるものである。共通語と比べても感情のこもった言い方や言葉、あるいは共通語では言い表せないような微妙なニュアンスを持った言葉などは、むしろ消えずにいて欲しいものである。

使用した「資料2」を見ていただきたい。これは、『静岡方言と私たち 方言語彙の実態調査』(静岡市立高校郷土研究部刊)からの引用である。なお、後掲の「資料3」「資料4」もこの刊行物による。

[資料2] 静岡市立高校の静岡方言に関するアンケート調査

調査期日 昭和59年9月

調査対象者 静岡市立高校1年 男子149名、女子46名

計191名(本人、両親共県内出身者に限る)

| 語句(意味) | 知っている者 (全体比率) | 使っている者 (全体比率) | 標準語意識 (知っている者中) | 備考 (男女比例等) |
|------------------|------------------|------------------|--------------------|---------------|
| いかい〈大きい〉 | 49% | 8% | % | |
| いと〈(その)間(に)〉 | 13% | 1% | % | |
| えーかん〈かなり〉 | 64% | 21% | 14% | 男子使用多 |
| おおぼったい〈うるさい〉 | 17% | 7% | % | |
| おぞい〈粗末だ〉 | 95% | 66% | 47% | |
| かじくる〈ひっかく〉 | 87% | 36% | 62% | |
| かたる〈仲間に入る〉 | 2% | 1% | % | 「かてる」とも |
| がらい〈うっかり・つい〉 | 10% | 2% | % | |
| かんだるい〈だるい〉 | 97% | 57% | 44% | 男子使用多 |
| きいない〈黄色い〉 | 46% | 4% | % | 女子知名多 |
| きぜわしない〈落ち着かない〉 | 13% | 1% | % | |
| くすぐ・くすぐる〈突き刺す〉 | 59% | 8% | % | |
| こつい〈小さい〉 | 13% | 1% | % | 「こすい」とも |
| ごせっぱい〈せいせいする〉 | 41% | 8% | % | 「ごせっぱー」とも |
| こば〈隅〉 | 27% | 4% | % | |
| さばく・さばける〈裂く〉 | 65% | 8% | % | |
| さら〈(箱)ごと(運ぶ)〉 | 87% | 55% | 60% | 接尾語 |
| さーらつく〈前につんのめる〉 | 1% | 1% | % | |
| しゃつたらにくい〈憎らしい〉 | 18% | 3% | % | |
| じるい〈ぬかるんで柔らかい〉 | 37% | 5% | % | 「じゅるい」とも |
| しょんない〈仕方ない〉 | 100% | 75% | 45% | 男子使用多 |
| ずだい〈まるで・全然〉 | 3% | 2% | % | |
| ずない〈強い・賢い〉 | 6% | 0% | % | |
| せちがる・せちがれる〈ねだる〉 | 9% | 1% | % | |
| せんころ〈先だって〉 | 20% | 2% | % | |
| ぞんぐりする〈ひゃつとする〉 | 6% | 0% | % | |
| たんだくたった(〜だけ) | 37% | 8% | % | |
| ちょうらかす〈あやす・嘲弄する〉 | 4% | 0% | % | 「おちゃらかす」とも |

※知っている者50%以下除外

| 語句(意味) | 知っている者 (全体比率) | 使っている者 (全体比率) | 標準語意識 (知っている者中) | 備考 (男女比例等) |
|----------------------|------------------|------------------|--------------------|---------------|
| ちよつくら くちよっと・少し | 93% | 43% | 23% | 男子使用多 |
| ちんぷりかくく(子供などが)すねる | 24% | 3% | % | |
| てごっさい〈始末に悪い〉 | 0% | 0% | % | |
| なむない〈役にも立たない〉 | 12% | 0% | % | |
| なりき〈粗雑〉 | 39% | 10% | % | |
| ぬくとい〈ぬくい・暖かい〉 | 87% | 23% | 22% | |
| はだって〈わざわざ・わざと〉 | 26% | 5% | % | |
| ぼったく〈席を奪った・先取した〉 | 98% | 77% | 50% | 女子使用多 |
| はぶく〈仲間はずれ〉 | 97% | 63% | 57% | 「はぶせ」とも |
| ひどろしい・ひづるしい〈まぶしい〉 | 25% | 2% | % | |
| ひなる〈かん高く叫ぶ〉 | 14% | 1% | % | 女子知名多 |
| ひまっさい〈ひまつぶし〉 | 3% | 0% | % | |
| ぶしょったい〈不潔だ〉 | 99% | 80% | 53% | |
| ぶそる・ぶそくる〈不平を言う〉 | 86% | 35% | 35% | |
| ぶっさろう〈打つ・殴る〉 | 98% | 57% | 43% | 男子使用多 |
| ぼったつ〈つっ立つ〉 | 68% | 20% | 27% | |
| まめったい〈よく働く〉 | 96% | 35% | 40% | 女子使用多 |
| みがましい〈器用だ・精出すこと〉 | 4% | 0% | % | |
| みこくひいき・おぼえ | 21% | 6% | % | |
| みるい〈未熟だ・柔らかい〉 | 58% | 9% | 25% | |
| やぐい・やごい〈やわらかい〉 | 2% | 1% | % | |
| やっきりする〈腹が立つ〉 | 97% | 53% | 40% | 女子使用多 |
| やぶせったいくうとうしい | 20% | 2% | % | |
| ゆるせい〈気楽だ〉 | 14% | 2% | % | |
| らんごくく〈乱雑〉 | 2% | 0% | % | 「らんごくない」とも |
| (そんなこと)あらずかく(～あるものか) | 83% | 19% | 24% | 否定意志 |
| (いい)じゃんく(～ではないか) | 96% | 76% | 70% | 断定・念押 |
| (そう)ずらく(～だろう) | 90% | 6% | 2% | 推量 |
| (行か)ぜえく(～しよう) | 90% | 42% | 35% | 勧誘 |
| (悪い)つけく(～た) | 87% | 61% | 45% | 過去・他 |

※知っている者50%以下除外

四 静岡方言の特徴

静岡方言の漸移地帯としての性質はこれまでに述べたが、この性質がまず、静岡方言の大きな特徴のひとつである。これは全国的に見て、東西南北のほぼ中央にあたる位置的な条件の上に、数々の有数河川という自然の障壁を持つことにより、東西のどちらか一方の早くに流れ込んだことが広がってしまうことがないという地理的条件の両方を合わせ持っているからこゝ出来上がったといえる性質である。同じように漸移地帯としての性質を持つところもあるが、静岡県のように条件を合わせ持つ地域は少ないところから、この性質は静岡方言の大きな特徴の一つであるといえる。

さて、その次に、静岡の言葉づかいは語尾を簡略化する傾向があることが挙げられる。例えば、この辺りがズラ地帯といわれるところの「くだらう」というときの「くずら」や、いわゆるジャン言葉といわれる「くではないか」の「くじゃん」、その他「くすか」（くすなまのかの意）や、「くけん」（くだけれどもの意）などがそうである。ナマクラ言葉といつてしまえばそれまでだが、気候・風土以外の影響もあるのではないかと考えたい。

また、静岡方言の中には、ある動作をいつたり、ある状況を表したりするのに、共通語よりもずっとピツタリとした言葉がある。例えば、「つつ立つ」というよりも「ぼつ立つ」といった方がいかにボサーッと立っているように感じるし、「疲れた」

というより「かんだるい」といった方が大変そうに感じる。その他にも、「おぞい」や「ぶそる」（不平を言う）、「ぶしょつたい」「おおほつたい」（うるさい）などもそうである。このような語について考えてみると、これらの言葉を考えて人はうまいことをいったと感心する。

加えて、全体的に静岡方言を見てみると、みんな口調がやわらかであるといえる。「かまう」（いじめる・悪態をつく）などは、共通語では露骨過ぎて上げつない言葉になりそうな言葉を少し丸く、やんわりと婉曲に伝えることができる。これは、静岡が温暖な気候であり、そこには住む人々もみな性格的に穏やかで、のんびりしているという地域性の表れであるのかとも思う。

こうしていろいろな角度から静岡方言を考えてみると、これらの言葉の特徴の一つ一つが、静岡の特徴であり、いつてみれば、静岡方言とは静岡という土地を表す大切な特徴の一つであるとも思う。

しかし、第一章、第二章の角度で考えてみると、たとえば「かんだるい」は『日本国語大辞典』によると、「かいだるい（腕弛）」が変化した語で、「腕がくたびれてだるい」という意味の「かいだるい」がもとであり、そこから「身体や身体の一部が疲れてだるい。かつたるい。」という意味に変化したものらしい。方言としては、山梨県や三重県、和歌山県等、かなり広く分布しているらしい。静岡方言はこのような分布内にあるという見方も忘れてはならないと思う。

今後こうした静岡方言がどのように変わっていくのかは、私には予測することはできないが、これから先もずっとこのまま消えることなく残って欲しいと願うと同時に、そのためにも私たち若い世代の人間が方言を認め、大切にしていかなければいけないと思う。

第四章 静岡方言の歴史的考察

一 静岡方言の現状

これまでも述べてきたが、若者の方言離れは確実に進行している。静岡県でもその傾向がみられることは第三章の資料でも明らかである。アンケートに答えた高校生たちは、方言を知っているながら実際にはそれを使っていない人や、静岡方言の代表的なものでも知らないという人が多かった。

私自身は、両親ともに生まれも育ちも静岡県（清水市）の間で、また、祖父母と話す機会も多いことから、純粹な静岡方言は身近にあり、第三章で取りあげたいいくつかの言葉は大体のものを知ってはいるものの、実際に使っているのは約三分の一に過ぎない。

メディアが発達し、テレビでも新聞でも雑誌でも、日本全国に同じ情報が同じように伝わるようになった現代では、このような傾向は静岡方言に限らず、全国のあちらこちらで同じようにみられるはずである。

では、このように静岡方言の一部が衰退しつつある傾向を、高校生の『静岡方言に関する実態調査』における、過去十年間の推移や、年代差による実態の比較などを通してそれとともに眺め、静岡方言の歴史的考察をしていきたいと思う。

二 静岡方言の残存状況一・十年間の推移

ここでは、高校生における静岡方言の十年間の推移をみていくこととする。

最初に、この比較考察においては、最近十年間では比較可能な資料がないため少々古い資料を用いることを断っておく。

この資料は、市立静岡高校の郷土研究部の部員が昭和四十四年と昭和五十五年、それぞれ高校生を対象に行った『静岡方言に関する実態調査』のアンケート結果を表にまとめたものである。この表の二十九語をもとに高校生における十年間の方言使用の推移をみていく（↓「資料3」）

昭和四十四年と昭和五十五年の高校生の間で、方言の実態がどのように変化したのかは大変興味深いものであるが、共通して比較できる語が二十九語と少なく、また、昭和五十五年の調査からすでに十年以上の年月が経っている現在なのだから現状はさらに変わっているだろうことを考えたら、ここで正確な推移を提示することは困難なことである。しかし、過去の推移として、大まかな傾向はこの資料からつかむことができるかと思う。

[資料3] 『静岡方言に関する実態調査』より静岡方言の残存状況(十年間の推移)
分析(1)

知っている者(全体)

| 比較 % | 55年度調査(16~18才) | 44年度調査(16~18才) |
|----------------|---|--|
| 100 ∩ 90 | しょんない、うっちゃる(2) | みるい、ひどろしい、ぶしょった い、おとましい、そうずら、おぞ い、ぬくとい、さばける、いいじ ゃん、せつない、ええかん、かん だるい、そればっか、しょんない、 うっちゃる、ぼったつ(16) |
| 89 ∩ 80 | ぶしょったい、やつきりする、い いじゃん、そればっか、ぼったつ (5) | ごせつぼい、かまう、きゃある(3) |
| 79 ∩ 70 | おとましい、そうずら、おぞい、 ぬくとい、せつない、かんだるい、 かまう(7) | ぶそる、やつきりする(2) |
| 69 ∩ 60 | みるい、ぶそる、さばける、ええ かん、きゃある(5) | なりき、やぶせったい、たんだ(3) |
| 59 ∩ 50 | ごせつぼい(1) | せんころ(1) |
| 49 ∩ 40 | くすぐ(1) | おおぼったい(1) |
| 39 ∩ 30 | なりき、ひどろしい、たんだ(3) | |
| 29 ∩ 20 | おおぼったい、やぶせったい、せ んころ(3) | くすぐ(1) |
| 19 ∩ 10 | ぞんぐり(1) | ぞんぐり(1) |
| 9 ∩ 0 | らんごく(1) | らんごく(1) |

分析 (2)

使っている者 (全体)

| 比較 % | 55年度調査 (16~18才) | 44年度調査 (16~18才) |
|----------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 100 └ 90 | | |
| 89 └ 80 | | いいじゃん、しょんない (2) |
| 79 └ 70 | ぶしょったい、いいじゃん (2) | ぶしょったい、おぞい (2) |
| 69 └ 60 | おぞい、しょんない (2) | みるい、せつない、かんだるい、 うっちゃる (4) |
| 59 └ 50 | やっきりする、せつない、かんだ るい、うっちゃる (4) | やっきりする、ぬくとい、これば っか、かまう (4) |
| 49 └ 40 | ぶそる、ぬくとい、こればっか (3) | なりき、おとましい、ぶそる、さ ばける、うっちゃる (5) |
| 39 └ 30 | みるい、おとましい、さばける、 ええかん、かまう (5) | |
| 29 └ 20 | ごせっばい (1) | ひどろしい、ええかん (2) |
| 19 └ 10 | なりき、おおぼったい、そうずら、 たんだ、くすぐ、きゃある (6) | ごせっばい、おおぼったい、やぶ せったい、たんだ (4) |
| 9 └ 0 | ひどろしい、やぶせったい、せん ころ、らんごく、ぞんぐり (5) | ぞんぐり、そうずら、せんころ、 らんごく、くすぐ、きゃある (6) |

まず、分析(1)で目立った差という点、昭和四十四年においては、二十九語のうち、知っている者の率が九〇%を越えるものが十六語もあったのに対し、十年後の昭和五十五年においてはほんの二語となっている点である。

例えば、「みるい」(未熟だ・乗らかい)は九十%台から六〇%台に、「ひどろしい」にあつては九十%台から三十%台にといった具合である。その他にも「ごせつぽい」の八十%台から五十%台に、「やぶせつぱい」の六十%台から二十%台へと、それぞれ著しく減少している。こうした現象がこれからさらに進行していくものなのか、現状維持で落ち着くものなのかは明らかにすることができないのが残念だが、この資料をみてきた私なりの予測と、静岡方言を話す若者としての立場からいえば、調査の時から十年以上の年月が過ぎていっているのだから、現在ではさらに減少しているものと考えて良いかと思う。

一方、分析(2)の使用率については十年間にそれほど大きな違いはみられない。なかには「みるい」のように六十%台から三十%台に半減したもののや、「なりき」(粗雑のように四十%台からわずかに十%台にまで減少したのももあるが、反対に「うっちやる」(捨てる)は四十%台から五十%台に、「ええかん」(かなり)は二十%台から三十%台に、というように増加したのものもある。変化したもののほとんどが十%程度の差で大きな変化はないのが実状のようだ。

静岡方言もこの調査の実施から現在までの十年の間に、知ら

れている語・使われている語ともにしだいに減少しつつあるようだ。現状を踏まえて考えてみると、このまま月日が過ぎていくと、ほとんど忘れられ、消えていってしまう言葉もあるだろう。そして、その言葉を消していくのは私たち若い世代の間人たちなのである。このことについて、もう少し多くの若者が意識をもってくれたらと思う。

三 静岡方言の残存状況二・世代による比較

第二節では、高校生のみを対象として実施された実態調査の資料を参考として、静岡方言の残存状況を、知名度と使用度の二つの側面から分析してみた。これだけでは、推移の状況を知るには多少不十分であると思うので、これに付け加えるかたちで、また別の資料を参考にして違った側面からの考察をしてみたいと思う。

次の資料は、同じ条件のもとで高校生と中・高年令層の人たちに対して行った実態調査の結果を表にまとめたものである(↓[資料4])。

まず、分析(1)・(2)の全体からみてわかることは、高校生と中・高年令層の大人とでは静岡方言の実態(知っている者・使っている者)に相当の差があることである。特に、分析(1)の(知っている者)においてはその差が著しく表れている。中・高年令層ではすべての語が五十%を超えているうえに、そのうちの約七割の語が九十%以上という高い率を示しているのに対し、高

[資料4] 『静岡方言に関する実態調査』より静岡方言の残存状況（世代による比較）

分析 (1)

知っている者（全体）

| 比較 % | 若年令層（16～18才） | 中・高年令層（40～75才） |
|----------------|---|---|
| 100 ∩ 90 | うっちゃうる、しょんない (2) | ごせつぼい、ひどろしい、おしょ ったい、みるい、なりき、おとま しい、あたける、やつきりする、 ぶっさらう、ぼったつ、かまう、 うっちゃうる、さばける、まめった い、おぞい、ひやっこい、ひつっ こい、かんだるい、しょんない、 ぬくとい、せつない、ええかん、 せんころ、そのいと、はだって、 こればっか、ちよっくら、あらす か (28) |
| 89 ∩ 80 | ぶしょったい、やつきりする、ぶ っさらう、ぼったつ、こればっか、 ちよっくら、～じゃん (7) | こば、ぼった、おそる、たんだ、 ～ずら、～じゃん (6) |
| 79 ∩ 70 | おとましい、ぼった、かまう、お ぞい、ひやっこい、かんだるい、 ぬくとい、せつない、あらすか、 ～ずら、～ぜえ (11) | おおぼったい、やぶせったい、く すぐ、ぞんぐり、～ぜえ、おまっ ち、きゃある (7) |
| 69 ∩ 60 | みるい、おそる、さばける、ひつ っこい、ええかん、おまっち、き ゃある (7) | らんごく (1) |
| 59 ∩ 50 | ごせつぼい、まめったい、～さら (3) | みこ、～さら (2) |
| 49 ∩ 40 | こば、くすぐ (2) | |
| 39 ∩ 30 | ひどろしい、なりき、みこ、たんだ、 そのいと、はだって (6) | |
| 29 ∩ 20 | おおぼったい、やぶせったい、せ んころ (3) | |
| 19 ∩ 10 | あたける、ぞんぐり (2) | |
| 9 ∩ 0 | らんごく (1) | |

分析 (2)

使っている者 (全体)

| 比較 % | 若年令層 (16~18才) | 中・高年令層 (40~75才) |
|----------------|---|--|
| 100 ∩ 90 | | |
| 89 ∩ 80 | | やっきりする (1) |
| 79 ∩ 70 | ぶしょったい、～じゃん (2) | うっちゃる、おぞい、ひつっこい (3) |
| 69 ∩ 60 | おぞい、しょんない (2) | ごせつぼい、おとましい、まめつたい、かんだるい、ぶしょったい、しょんない、せつない、こればっか、みるい、なりき (10) |
| 59 ∩ 50 | やっきりする、うっちゃる、ひつっこい、かんだるい、せつない (5) | ぶそる、ぼったつ、かまう、さばける、ひやっこい、ちよっくら (6) |
| 49 ∩ 40 | ぼった、ぶっさらう、ぼったつ、こればっか、ちよっくら、ぶそる、ぬくとい、～ぜえ (8) | ひどろしい、ぶっさらう、くすぐ、ぬくとい、せんころ、こば、そのいと、はだって、あらすか、～ずら、～じゃん、ぼった、あたける (13) |
| 39 ∩ 30 | みるい、かまう、さばける、ええかん、あらすか、おとましい (6) | おおぼつたい、ぞんぐり、ええかん、たんだ、やぶせつたい、～ぜえ、～さら (7) |
| 29 ∩ 20 | ごせつぼい、まめつたい、ひやっこい、～ずら、～さら、みこ (6) | みこ、おまっち (2) |
| 19 ∩ 10 | なりき、くすぐ、たんだ、そのいと、はだって、おおぼつたい、おまっち、きゃある、こば (9) | らんごく、きゃある (2) |
| 9 ∩ 0 | ひどろしい、ぞんぐり、せんころ、やぶせつたい、らんごく、あたける (6) | |

校生の間では九十%に達している語はたったの二語のみである。高校生では「らんごく」・「あたける」・「ぞんぐり」などは、すでに知っている者もほとんどないような状況で、近いうちに完全に忘れ去られてしまうのかもしれない。まず、この点から中・高年層と高校生の若い年令層との間に大きな開きがあることがわかる。三十年、四十年の世代の違いがこの差を示しているということはすなわち、ここ三・四十年の間に静岡方言が衰退しつつあるというこの表れである。

一方、これらの方言を実際に「使っている者」はどうかといえば、こちらの分析(2)では中・高年令層においてもその率はかなり落ちこんでいるようである。かつては皆が使っていたはずの方言もそのほとんどの使用率が三十%から六十%台にあることがそのことを裏付けている。とはいっても、高校生の若い世代との間には相当の差が認められる。若い世代でほとんどの語が使用率ゼロから五十%にあり、約半分が三十%未満という低い使用率を示している。言葉づかいは年令によって変化することが多いものであるから、一概にはいえないが、やはり使用率も確実に落ちこんでいくものであろうという予測を立てざるを得ない。

語の単位でみてみると、中・高年令層の人たちの間では高い使用率を示すいわゆる代表的な静岡方言も、若い人たちの間では、すでに衰退しつつあるものが目立つ。例えば「やつきりする」(腹が立つ)は八十%が五十%、「ごせつぽい」は六十%が二

十%、「おとましい」は六十%が三十%と、だいたい半分以下の使用率といった具合である。

しかし、見方をかえると、メディアが発達し、あらゆる面で共通語に接し、すべてのものの読み・書きが共通語でなされる今日にあって、なおも話し言葉においては、地域の独特の言葉である方言が、以上のように差こそあれ、年代を問わずに人々の間に生きていることは喜ばしいことである。

四 静岡方言の歴史的考察

ここまでみてきたものをまとめると、静岡方言はここ何十年もの間明らかに衰退を続けているといえる。こうした状況が続けば、完全に消滅する語も出てくるだろう。具体的には若年令層の使用率の低い語、特に三十%未満の語などは、そのうちの多くが、今後消滅の方向をたどっていくことが予測される。日常にある読み・書きなど、すべてのことが共通語でなされる今日にあって、意外にも根強く生き残っているとの見方も加えておいたが、やはり、遅かれ早かれ消滅の事態を迎える語があるということは覚悟しなくてはならない。ただし、言葉づかい、それも方言などは特に年令との相関関係があるので、今の若い世代の私たちが中・高年令層に達したときどのような実態を示すのが問題として残る。

結論的には、意外に根強く生き残っているように見えながらも、やはり確実に衰退しつつあるといえようか。

ここでは別の角度からの歴史的考察として、これまでにあげてきた語について『日本国語大辞典』で調べた結果をのべておこうと思う。

この辞典をみると、静岡県西部で知名度、使用度ともに高い「らんごく」は、方言としてではなく、普通語の見出しとして掲げられている。この語は「入り乱れて飛びかうこと」などの意味の「らんびらんがい（乱飛乱外）」がもとになるらしい。「らっぴらんごく」の略と説明されている。洒落本・滑稽本・雑俳からの用例があげられている。この辞典は、普通語の場合でも、方言としても用いられている語には方言としての説明が加えられているが、それによると、「乱暴」の意味で岐阜県、「大騒ぎ」の意味で静岡県、また、形容動詞として「取り散らしているさま。乱雑なさま」の意味で静岡県・愛知県・愛媛県等で用いられている。方言としては静岡県以西で用いられていることがわかるのである。この語は、近世語が方言として残ったものといえる。

「あたける」も普通語として記されている。「あばれさわぐ」等の意味で歌舞伎・俳諧から用例があげられている。「たわむれる・おどける」の意味では「物類称呼」の「ざれたはふるる事を略」陸奥にて、あだけるといふ」をあげている（この語は「あだける」ともいう）。方言としての説明では、「ふざける。さわぐ。あばれる」の意味で、茨城県・新潟県・石川県等をあげている。この語は静岡県以西の分布とはいえない。

「ぞんぐり」は出ていない。しかし、このように、方言には近世語にさかのぼれるものがあることに注目しなければならぬだろう。

静岡県東部で知名度、使用度ともに高い数値を示す「やぶせつたい」も普通語の見出しで、滑稽本の「続膝栗毛」から「わいらはどこだとも思ふ。うらが所だ。がいにやぶせつたくくぜりこくな」という用例があげられているが、これは当時の方言かと思われる。方言としては、神奈川県・山梨県・静岡県などで、静岡県から西にはない。

「おぞい」にはいろいろな意味がある。「気が強い」「恐ろしい」の意味では「源氏物語」の用例もある。「よくない。悪い」の意味では「物類称呼」の「わるいといふ事を略」尾州辺又は奥州仙台にて、をぞいと言ふ」をあげている。静岡県の方言「おぞい」はこの意味で残ったものであろう。また、「悪賢い」の意味では「新編常陸国誌」から「おぞい 江戸にてこすいと言ふ、おぞまじきなるべし」をあげ、「利口である。賢い」の意味では「物類称呼」から「をぞいと略」駿河わたりより武蔵上野辺迄物事かしこき事に言いならはせり」を、「新編常陸国誌」から「をぞい 人の利口なるを言ふ」をあげている。方言としての説明でもいろいろの意味があり、関東以西で広く使われていることがわかる。それが、静岡県では東側にとどまり、西側には波及しなかったのかと思われるのである。

「こぼ」は方言としての見出し語はあるが、「隅」という意味

はない。

古語は方言に残るといわれるが、方言のこのような歴史的背景にも注目しなくてはならないだろう。これらの語がいま消滅の方向をたどっているのである。方言の認識・理解にはこうした一語一語の歴史的背景を知ることが不可欠なことではないと思うのである。

このほか、この辞典で普通語として掲げられている語には、「せつぱい」「ぐずら」「ちよつくら」「かんだるい」「ええかん」「おとましい」「うつつやる」などがある。「くけん」は「故」から」の意味で出ているが、静岡方言の「くだけれども」の意味はここから派生したものと思われる。これらの方言はだいたいい近世語にさかのぼることができるといえる。

「方言」として掲げられている語には、「ぶしよつたい」「ぶつさらう」「しよんない」「みるい」「なりき」「やつきりする」などがある。「くじゃん」は「じゃんか」の見出しで出ている。また、「ひどろしい」は「ひどろら」「ひどろつこい」の見出しで出ている。

この辞典に掲げられていない語は「ぶそる」「おおぼつたい」「ぼつたつ」「くすか」である。

このような面から、方言の中には古語が残ったもののがかなりあり、また「○○県の方言」という見方は第一章・第二章のような全国的な見方の中から特定の県を切り取って述べたもの（例・静岡県の方言）であるということがわかるのである。

むすびとして

従来方言といっているものの中には、古語がある地域に限って残ったもの、アクセントの変化したもの、音韻上の変化に由来するものなどがあり、それらを一括して方言といっているが、要するに方言とは、言語の地域による差であり、その地域だけで話される言語のことである。一般的にはこう言われている。

今回、自分で実際に方言について検討してみよう。述べてみよう。今回は、第一章から第三章へと、徐々に焦点をしばってゆくかたちで、全国的な視野から静岡県の方言へとしばって見てきたが、静岡の方言の考察ということになると、今度は逆に、静岡県の周辺、そして東海東山地方へと、視野を広げて検討していかなければならないことがわかった。これは、東西の言葉の漸移地帯という特色を持つ静岡方言だけについて言えることではないだろう。方言は県という行政区画で異なるものではないのだから、これは当然のことであると思う。また、古語は方言に残るといえるが、方言といっている言葉も歴史的な背景を持つものであることがわかった。方言と国語史という視野で検討することによって、その地域の言葉が立体的にとらえられるのであろうと思った。

今回、卒業論文を作成する間に、ある学校の先生の手記のようなものを読んでいて、その中で、フランスのある地方では、小学校の教員採用試験にその地域の方言を出題するという記事

を目にした。それを見て、「なるほど、それもそうだな」と思った。というのも、小学校のころ、他の地方から赴任してこられた先生が、私たちの話す方言や、作文の中に出て来る方言的な表現を、違った意味に勘違いされていたり、間違った言葉づかいであると注意されていたことを思い出したからである。しかし、はじめのコミュニケーションの段階で、一番のキーポイントとなる言葉の疎通が図れないことは、その後の親しいつきあいにも影響する大きな欠点にもなりうる。

かつて、学校教育では方言の矯正指導が行われた例もある。しかし、方言蔑視を伴う言葉の統一化、すなわち共通語化は決してよい結果ばかりを生むものではない。地域の伝統や文化の見直しが叫ばれる昨今、風土や人のくらしに密着した地域の言葉、方言がもつ親しみをなつかしむ人は多い。

「正しい言葉づかい」と「方言（地域的表現）」との関わりあいまささいな部分に見えるが、もう少し教育の場で取り上げることがあつてもいいのではないかと思う。言葉の統一化ではなく、方言を理解するための教育である。それによって、少しでも多くの子供たちや、私のような若い世代の人々が、地域の生活や文化の実態を伝える、生きた文化財である方言に対する意識を高めることができれば、と思うのである。さらに、方言と共通語をうまく使い分けられる中で、その傍らで、方言が日本語のひとつの個性として共通語とうまく共存できたらと思う。そしてますます、日本語が多彩で豊かなことばになっていった

らと考えるのである。

参考資料・文献（○印は主要資料）

- 「方言文法全国地図」国立国語研究所
- 「日本言語地図」国立国語研究所
- 「全国方言辞典」東條操編 東京堂 昭和二六年
- 「増補 俚言集覧」村田了阿 名著刊行会 昭和四〇年復刊
- 「日本大文典」ジョアン・ロドリゲス 三省堂 昭和三〇年復刊
- 「諸国方言 物類称呼」京都大学文学部国語国文学研究室編 昭和四八年復刊
- 「日本国語大辞典」小学館 昭和五〇年
- 「日本文法事典」北原保雄ほか編 有精堂 昭和五六年
- 「静岡県方言辞典」静岡師範学校・静岡女子師範学校 国書刊行会 昭和五〇年復刊
- 「静岡方言と私たち 方言語彙の実態調査」静岡市立静岡高校郷土研究部 昭和五九年
- 「静銀の窓 アンケート調査、静岡弁とわたしたち」静岡銀行 昭和五六年
- 「静岡県の方言調査報告書」静岡県教育委員会 昭和五九年
- 「全国方言辞典」平山輝男編 角川書店 昭和五八年
- 「日本の方言地図」徳川宗賢編 中公新書 昭和五四年
- 「日本人の方言」徳川宗賢著 筑摩書房 昭和五三年
- 「方言から見た東海道」山口幸洋著 秋山書店 昭和五七年
- 「日本古典文学全集四三・近松門左衛門集」森修ほか編 小学館 昭和四七年
- 「日本古典文学全集四七・洒落本・滑稽本・人情本」中野三敏ほか編 小学館 昭和四六年

【付記】筆者の希望により、添削をおこなった。遠藤記。

(終り)